



フィリピン赤本社のあるマンドルーオン市の風景（右側の建物がフィリピン赤本社ビル）

セブ通信

フィリピン・セブ島北部
地域保健衛生事業の現場から

vol. 1

2017. 9. 30 田村 由美

復興支援から開発協力へ

神戸赤十字病院では、現在 5 名が日赤の国際救済・開発協力要員として登録されています。2015 年度の二星 Ns の「ケニア通信」、2016 年度の三嶋 Ns の「グイスカヤ通信」にならない、「セブ通信」では 9 月 16 日から来年 3 月 14 日までの約半年間の活動の様子をお伝えしていきたいと思ひます。

首都マニラへ到着

成田空港を出発して約 4 時間、フィリピンの首都マニラへと到着しました。日中の気温は約 30 度、今は雨期のため、夕方になると毎日と言っていいほどスコルが降ります。市内には高層ビルやショッピングセンターが立ち並び、ひっきりなしに人々や車が行き交います。ここマニラにあるフィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）本社で 2 週間にもわたって、関係者の方々へのご挨拶に回るとともに、フィリピン赤の活動や事業についてのオリエンテーションを受けました。そして 9 月 30 日、いよいよ活動地であるセブ島に向けて出発です。

保健衛生状況の改善を目指して

フィリピンのセブ島北部は、今から約 4 年前の 2013 年 11 月にフィリピン中部を直撃した超大型の台風「ハイヤン」によって、非常に大きな被害を受けた地域の 1 つです。

この台風による災害に対し、日赤は発災直後から医療救援活動を実施しました。翌年の 2014 年からは、被災地の中でも救援団体が少なかったセブ島北部で復興支援活動を行い、3 年間の復興支援活動が完了した今年 1 月から、地域保健衛生事業を行っています。

この地域保健衛生事業では、2 年をかけて、これまでの復興支援では手が届かなかった地域にもトイレや飲料水など保健衛生の知識が浸透するよう、フィリピン赤と協力して活動を行っています。

私はこの地域保健衛生事業に日赤要員として派遣され、フィリピン赤のスタッフと一緒に事業対象の村落を訪問し、活動の中心となるボランティアの募集や研修を行うことで、保健衛生の啓発やサービスが円滑に提供されることを目指します。

事業の要となる 143 ボランティア

フィリピン赤ではマンパワーの 80%がボランティアであり、赤十字活動において大きな役割をはたしています。

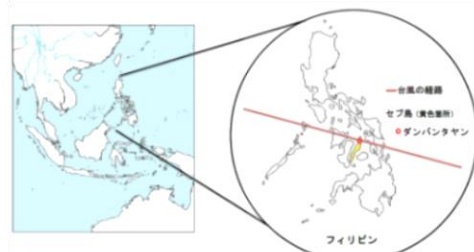
フィリピン赤のボランティア活動は、1 人のボランティア・リーダーと 43 人のボランティア・メンバーからなる 44 人のグループ「143(one four three)ボランティア」を中心に活動します。救護活動や災害マネジメント・血液などの各種事業が、ボランティアの活発な活動によって行われています。赤十字活動も、国・地域によっていろいろな特色があるんですね。

次号では、セブ島での活動についてお伝えする予定です。



救援物資の箱詰め

ミンダナオ島マラウイ市に送る救援物資（食糧）の箱詰め作業を手伝う機会がありました。段ボールの中には米 5 kg、コンビーフの缶詰 15 個、インスタント麺 5 袋、インスタントコーヒー 12 袋が入っていて、1 家族に 1 箱配布されるそうです。



サラ マッ ポ “Salamat po.”（ありがとう）

フィリピンには 7109 もの島があり、100 以上の民族が住み、80 もの言語が話されています。公用語はタガログ語。「ありがとう」の一言は、どの国でも人を笑顔にします。